



大本山永平寺

振鈴

永平寺をはじめ、曹洞宗の修行道場では起床時刻を知らせるために、当番の僧侶が大きな鈴を振りながら堂内を回り、皆を起こすのが古来からの習わしです。永平寺では冬は午前四時半、春と秋は午前四時、そして夏は午前三時半と起床時刻が厳密に定められています。

この五月から夏時刻に移りしばらくの間、午前三時半の起床となります。

外は漆黒の闇。朝と呼ぶには程遠く、草木も眠っている時間なのでしよう。しかし私どもは起きなければなりません。辛かろうが、眠かろうが起きるのです。

早起きして坐禅に親しみ、長時間を要する法要と朝のお勤めを行っても称賛されることはありません。ただひたすらに行ずるのみであります。

今月より百日間は夏なつせい制中ちゆう（禁きん足そく修行の期間）となり修行も一層厳しくなります。

自分の心と体でお釈迦さまから繋がる教え、戒めを得られるようにと励まし合い、修行に専念します。

※四月号14行目「六の戒は」十六の戒の誤りです。訂正してお詫び申し上げます。（出版課）



大本山總持寺

学校授戒会



学校授戒会「散華の舞」

五月十日、十一日には恒例の学校授戒会が行われます。総持学園鶴見大学附属高校の三年生全員が、本山に一泊し、坐禅や朝課に参加しお説教を聞き、仏教を学びます。そして、禅師さまから親しくご戒法を授かります。生徒たちは、總持寺のお膝元で学ぶことのできる尊さを知り、仏教徒として新たな一歩を踏み出すこととなります。この学校授戒会は多くの人びとに戒法を授けられた瑩山禪師のご意志に基づくものでもあります。また五月十三日から十七日の五日間は、制中五則の期間となります。

曹洞宗のさまざまな伝統ある儀式が執り行われます。修行僧たちは皆、熱心に法式を学びます。十六日は大布薩講式です。修行僧たちの自省の儀式で、曹洞声明による荘嚴な儀式です。そして十七日は首座法戦式です。千畳敷の大祖堂で禪の大問答がくりひろげられます。二十五人の問者が、修行僧のリーダーである首座に対して禅問答で挑みます。首座たる者そのすべてを論破出来なければなりません。かつては、場合によっては僧堂を去らなければならぬほどの真剣勝負でした。今度の首座も一世一代の覚悟を以て臨むことでしょう。

制中五則が終わると修行僧たちの修行はさらに前進します。

曹洞俳壇

選・村松五灰子

去年の巢なき被災地に燕来る

秋田県 小田瀧恭葉

評 あの日からもう一年余。燕たちは知らずに来ておどろいたことだろう。毎年予定していた家々が壊れたりなくなっている。燕たちもまた間接な被災。なすすべもない自然の猛威を燕をもつて語る。

昨夜撒いた豆一つある枕元

埼玉県 岡村 裕一

評 ふと気が付けば枕元に福豆が一つ。丁寧に拾い集めたつもりの眼残し。その福豆で昨日の「鬼は外福は内」の楽しいひとときが浮かぶ。一粒の豆が余韻を育てる。

◆大寒や煮豆の匂ふ路地暮らし 愛知県 田中 澤子

◆寝る前の薬一粒寒の水 千葉県 鈴木 英子

◆春雷やこざとく動く猫の耳 新潟県 大橋 恒次

◆托鉢の雪をまとひて去り行けり 北海道 大野 節子

◆無人駅降り妻訪ひの落葉道 群馬県 山本 俊久

◆晩年は今の事かや大根引く 広島県 岡村 憲謔

◆初孫の少し早めの雛まつり 三重県 植地 慶子

◆子の卸す雪の隠せる弥彦山 新潟県 星野 三興

◆元旦や好天息災吟醸酒 ロサンゼルス 井上 健一

◆寒の明け悴^{せむ}戻りし過疎の村 神奈川県 小野沢邦彦

*選者吟

街薄暑アルファベットの店並ぶ

五灰子

*作句小見

三句目の「煮豆の匂ふ路地」にも心惹かれます。田中さんの地に着いた庶民感覚の確かさから生まれた句。

日々の暮らしの中からかくの如く一句。

あまり構えないことが肝要です。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

きつきまで肩たたきくれしワランベはタン

ポポのなか小さき観音 愛知県 前田 操

評 作者はめでたく百歳を迎えられた方。この「ワランベ」は血縁の幼子と限らなくても良い。今ここに居たかと思つたら、もう花のなかに居る。子供の素朴な優しさと活発な動きを活写しつつ、眼前に浄土を見ているかのような一首だ。

就職の子が旅立ちて今日よりは暮らしの中
の音一つ消ゆ 秋田県 小田寫恭葉

評 家族の一人が成長して家を離れた寂しさが、生活の音によつて表現されている。その子の居なくなった空間にはさまさまの音が詰まっていたのだ。作者らしい発見がある。

◆きたきつね夜毎に通る庭中の雪に足跡深く残して

◆とうとうと汲み上ぐるほどに掌に温し地よりの 北海道 佐賀 ユリ

◆恵み凍冬の朝 福井県 三浦 豊子

◆地吹雪に籠るほかなきつれづれに友より賜ふ二冊の歌集 秋田県 佐藤 和子

◆最果てのオホーツクの海流水を飲み込むほどに 荒れ狂うなり 北海道 吉田 洋子

◆経行の如くに歩む人もいて哲学の道極月に入る 島根県 横山 稔吾

◆雪被く蕾も堅き老梅に寒行の鐘ひびき留す 滋賀県 島崎 佳子

◆多摩川の河原に夕闇迫りきてトランベツトが 風に乗り来る 東京都 長谷川 瞳

◆入口の雪を除けあれば安堵せり独居の安否訪ぬる家に 新潟県 長浜 武士

◆初雪は乾きたる樹々のそれぞれに白きをおきて 姿ととのふ 東京都 石場くに子

◆傲慢な貴女に訣別宣言すもう恐くない八十路になれば 宮城県 鎌田登喜子

*選者詠

この世にはもう居らぬ人話題にし

母の海原波立たせたり

ちづ

*作歌小見

お元気な百歳の前田さんとは違って、もう立つことも歩くことも出来ない母です。意識も朦朧としています。少しでも心平安に過して欲しいと思うのに、気持を乱すような会話をしてしまい反省しました。